

金城芳子基金10年

由井 晶子

(金城芳子基金事務局長)

沖縄協会が実施している沖縄女性の地位向上に寄与するための調査及び活動に対する助成事業・金城芳子基金は、創設から11年目を迎えた。同基金の設置に深く関わり、設置後運営委員、事務局長として同基金の運営に尽力されているジャーナリストの由井晶子さんに金城芳子基金について執筆していただいた。

はじめに

金城芳子基金が発足して10年がたちました。この間沖縄県内外の「沖縄の女性の地位向上に貢献する」と認められた10件（5団体5個人）に助成金が贈られました。この基金のように、大きな額ではないが、地道で真摯な研究などに資金援助したい人がいるようです。煩瑣かと思いますが、ご参考までに設立までの経過を含め、報告させていただきます。

金城芳子という女性

1991年5月21日、暑い日でした。沖縄タイムスの東京支社から本社の論説委員室に帰任して1年足らずで、忙しくしていましたが、外間米子さんから呼び出しがかかりました。

米子さん、金城芳子さん、琉球新報の三木健さんが琉銀前に待ち受けていました。金城さんが蓄えてきたお金を沖縄の女性のために寄付したいと申し出てられる。これから銀行に行き、それから記者会見をする、付き合ってほしいと急な話です。

金城さんは2日前に那覇市の功労者表彰のために沖

縄に来られ、米子さん、三木さん、ずっと金城さんの著書を手がけてきたニライ社の島袋捷子さんに寄付の相談をされ、米子さんが市川房枝基金制度を参考に金城芳子基金をつくって女性たちの研究などに資金助成をしてはと提案、即決、すぐに行動となったのでした。

どういう都合だったか、その日は記者会見はせず、私だけがお昼をご一緒しました。当時久米町で評判だった脱サラ夫妻の沖縄料理店で、イラブー（えらぶうなぎ）とアシテビチを「沖縄へ来るとこれが楽しみなのよね」と、ほんとおいしそうに召し上がりました。ここで琉球料理が完成したといわれる旧那覇の辻の街で育って、ことのほか味にうさいなは女の1人だった金城さんもお満足の様子で、私も嬉しかったのを覚えています。

晩年の金城さんは、年に何度もというほどしげしげと帰郷なさり、そのたび若い人たちと楽しい日を送られました。前年90年にも『金城芳子歌日記 おもひがなし』刊行祝賀会があり、私たちが「金城芳子をめぐる5人の男たち」と呼んでからかった40～60代のハンサムな“ボーイフレンド”以下大勢集まってにぎやかに一夕を過ごしたものです。



中央・金城芳子さん（90歳），左・三木健，右へ外間米子，
由井晶子（1991年5月21日）

しかし、「私が死んだら」としきりに口にされたこのころは、かなり弱られたと感じないわけにはいきませんでした。私にはこれがお会いする最後になりました。

翌5月22日には米子さん、三木さん、島袋さんと基金について話し合い、すぐにも公けにすべきだという意見が出たのは、金城さんの思いを早く形にしなくてはと、急かされる気持ちが強かったからでしょう。ちょうどそのころ来県された外間守善先生は、金城さんの最も近いところにいる立場から、反対でした。「芳子さんも若い時からさんざん苦労して、やっと楽になったんだ。蓄えはご自分のために使うべきだ。寄付なんかとんでもない」。

もっともな話で、ご家族の意見も聞かなくちゃならないしと、私たちも慎重になりました。実は、沖縄の口座には金城さんのおっしゃる預金がなかったのです。帰京後「東京の通帳にあったよ」「家族の話なんか聞くことないよ、私が決めることだもの」と電話や人を介して、ぐずぐずしている私たちが盛んにはっぱをかけられているうち、6月17日三木さんと米子さんから「芳子さんが転んで怪我をされた」「東京女子医大病院に入院」という知らせがきました。金城さんご自身からは「早く基金のことを決めて」と催促しきりです。金城さん帰郷の際、よくご面倒を見た沖縄調理師専門学校校長の新島正子さん、福祉事業でご懇意だった嶺井百合子さんも加わって相談の上、ご子息の金城辰夫

氏にお手紙を書くやら、再度外間先生にご意見を伺うやらしているうちに12月3日訃報が届きました。

21日那覇市のゆうな荘で執り行われた「金城芳子さんを送る会」は、68人も呼びかけ人が名を連ね、にぎやかなことが好きだった故人らしく、しめやかな中にもどこかはなやいだ追悼会になりました。辰夫、昭夫、和夫氏らご遺族も列席して、遺産の一部を寄付したいと宣言して下さいました。形式張らず、心から金城さんを慕う人たちが薫り高いランの花を遺影の前にささげるのを見て、嶺井百合子さんが「うらやましい。私もこんな葬式ができたらどんなに幸せだろう」と言われたのが心に残っています。

「贈られしバラ 深紅に燃えて 若きらの
しなさに似て 去り難きかも」

この日のプログラムに載せられた直筆の和歌は、1985年、沖縄でやはり大勢の人々に丑年の「生年祝い」をしてもらった時のよろこびを込めた一首です。金城さんは文化人、芸能人、大学学長や県知事から大工・看護師見習いといった働く若者まで、老若男女、幅広く多くの人に愛された女性でした。

基金設立まで

金城芳子さんは決してお金持ちではありませんでした。極貧だった若い頃から90年の生涯の大半は貧しい中で働きづめに働いてこられました。蓄えといっても、ご自分の公務員生活の中で、借家でのささやかな下宿業という内職でやりくり算段の果実と伺いました。それを沖縄の女性のために生かしたいという志を引き継ぐのは、ぼう大なほどの金城さんに直接間接にお世話になった人たち、また芳子ファンに対する義務とも思えました。

とりあえず金城芳子基金の趣旨をまとめ、女性の地位向上に寄与する研究や活動に助成する方法まで文章にしたものの、私たちには公益法人として寄付を直接受け付ける機能がありません。財団法人ひめゆり同窓会への寄託を考えたり、人材育成財団とか新しい女性財団も視野に入れたりしました。それぞれ目的が決まっいて、金城さんの遺志に沿えそう

にもありません。石垣市の大浜皓基金（学術研究）や源河医師の寄付によるあけもどろ学術基金、さらに故中野好夫、故川端康成といった方のケースなどを研究しましたが、いろいろと事情が違い、そのまま適用できません。

ご遺族がたいそう心労なさいました。結局ご長男辰夫氏の奔走で、沖縄協会に寄付することになった旨お知らせをいただいたのが、翌92年6月21日でした。金城さんは沖縄協会草創の頃から評議員で、本土で働く青少年の支援事業に専門の立場で助言したり、アイデアを出したりなさっていました。そんなご縁もあり、協会では快く引き受けてくださったのです。それから間もない平成4年（1992年）6月29日付で、沖縄協会に基金を設置、金城辰夫氏から提供された1千万円を原資とし、基金の運用による利息をもって年1回助成金を交付する、助成事業の選定と助成金の配分は基金運営委員会で決定する旨の「〈金城芳子基金〉設置要綱」と「〈金城芳子基金〉運営委員会設置要綱」が決まりました。

平成5年（1993年）から運用を始め、助成希望者の募集をしました。金城さんの業績紹介を兼ねて、この事業の趣意書「金城芳子基金について」を右に掲載します（要旨）。

盛んな女性の研究・実践活動

発足した金城基金は、毎年募集、選考を6月までに終え、7月初旬に発表・助成金交付、1年以内に中間報告をすることとして、第1回から第10回までに67件の応募がありました。厳正選考のうえ、助成を受けた10件（5団体、5個人）は別表の通りです。付記のように、平成15年（2003年）第11回も決定・交付しています。

応募作品は実に多岐にわたりました。女性をめぐる研究、実践活動、イベント開催に大きく分かれ、ジャンルも、歴史、社会、文化、芸術、教育、保育、女性問題、福祉、環境、産業とあらゆる面に及びました。いかに女性たちがグループや個人でさまざまな問題に取り組んでいるか、そして自発的な活動で時代の要請にこたえているかよく分かります。それぞれ小額でも資金援助を求めており、1件にしぼるのに忍びない思いをしたものです。

金城芳子基金について

……前略……

1901年（明治34年）生まれの金城芳子さんは、若き日に、沖縄学の創始者、伊波普猷らの感化を受け、大正デモクラシーの思潮の中で、近代女性としての自我に目覚めた人です。長年、東京にあって、夫・金城朝永らの沖縄研究を支え、自らも社会福祉事業に生きてきました。

戦後は、「東京ひめゆり同窓会」や「東京沖縄県人会」の活動、さらに「東京、おきなわふるさとの家」を主宰するなどして、沖縄の若者たちの育成にもつとめてきました。そのかたわら、『なはをんな一代記』をはじめ、随筆集『相思樹の花影』、対談集『沖縄を語る』、歌集『おもひがなし』などの著作を通じて、近代沖縄女性史歩みと、想いをつづってきました。

金城芳子さんは、1991年（平成3年）12月3日、他界されましたが、ご遺族から、生前、沖縄女性の地位向上ため献身された、故人の遺志を生かしたい、との趣旨により、当協会に1,000万円の寄付が提供されました。

当協会では、これをもって「金城芳子基金」を創設し、運営委員会を設け、沖縄女性の地位向上に役立てるために、この基金を運営していくことに致しました。

平成5年

財団法人沖縄協会

会長 佐藤 朝生

「金城芳子基金」運営委員会

委員長 新島正子（沖縄調理師専門学校長）

事務局長 外間米子（沖縄県有権者同盟会長）

委員 嶺井百合子（ひめゆり同窓会会長）

〃 由井晶子（沖縄タイムス社編集局長）

〃 三木 健（琉球新報社編集局次長）

選考は、応募要項にうたった①女性の地位向上に寄与、②原則として女性、③沖縄を対象としたものとし、県内県外を問わず、また内容次第で男性も可という緩やかな基準で行いました。優れた研究や定評のある活動でも、文部省や大学などの科学研究費を得られる可能性が考えられる場合や、自助努力で寄付金を得られる力のある団体より、無名、零細で切実に援助が必要な、もちろん社会的に意義のある研究や活動を優先しました。それが、金城芳子さんの遺志に沿うと考えられたからです。金城さんは、昭和初期の大失業時代、まったく恵まれない境遇で沖縄研究を続ける夫君、金城朝永を支え、あまりの生活苦に一家心中まで考えたといいます。常に貧しく、

弱い立場にある人々の味方でした。

ただ、固定的にこの原則にとらわれず、いわば融通無碍に対応してきましたが、選考経過については、記者会見でくわしく発表し、情報をオープンにしています。

第1回の「勤労働員された女性たち」、ひめゆりなど女子学徒とはまた違った苦難を体験した女性たちを調査研究した沖縄女性史を考える会から、第10回『女団協35周年記念誌—女性団体の歩み—』の沖縄県女性団体連絡協議会までの助成者を見ると、戦争と戦後もずっと米軍基地の下で生きてきた沖縄の女性たちの苦闘と、めげないたくましが浮かび上がるようです。また、現在の深刻な問題も垣間見えます。第11回も、基地軍隊を許さない行動する女たちの会による、基地から発生する問題との取り組みが選ばれました。

設立当時、県内にこのような女性を対象にした研究や諸活動奨励の支援・助成機関はなく、運営に携わる者たち一同、女性の地位向上に貢献し得たと自負しております。

今後の課題

10年の間に金城芳子基金を取り巻く状況が変わりました。93年は利率が最高に高く、第1回には35万円助成できました。その後利率は低下の一方で、年々助成額が減額され、もし金城基金だけの独自運用だったらとうてい助成を持続できない事態になりましたが、沖縄協会のご配慮で現在20万円を交付しています。協会とご遺族に感謝申し上げます。

基金運営委員会内部でも、熱心な推進者だった嶺井百合子さんが他界なさいました。委員の高齢化も進んで、今年で70歳未満は三木さん1人、次の10年は厳しくなります。

設立時にはなかったNPO支援体制ができ、また金城芳子基金を参考にした支援基金もあり、女性たちも動きやすくなりました。とはいえ、女性の活動はいよいよ盛んになり、金城芳子基金のようなユニークな資金援助の要請はむしろ強まる勢いです。

この時代の要請に応えるため、運営委員会では従来助成事業から一歩踏み出した基金の活用について、内部で、さらに沖縄協会やご遺族と意見交換、ご相談をしております。

応募件数（1993第1回～2003第11回、総数69件）と助成者・テーマ（2003年現在）

- 第1回 1993 9件（4団体5個人）
 助成 沖縄女性史を考える会（河名恵子代表）
 共同研究 「勤労働員された女たち」
- 第2回 1994 4件（3団体、1個人）
 助成 浦崎成子氏
 調査研究 「日本植民地下台湾における沖縄女性の労働—台湾出稼ぎ女中をめぐる」
- 第3回 1995 6件（2団体、4個人）
 助成 澤岬悦子（フリージャーナリスト）
 調査研究 「米兵と結婚した女性たちの調査研究」
- 第4回 1996 4件（2団体、2個人）
 助成 糸満サシミヤ研究会（上原政幸、久部良和子他）
 共同研究 「糸満地域のサシミヤ（鮮魚店）の研究～経営実態と所得向上のシナリオ～」
- 第5回 1997 4件（1団体、3個人）
 助成 柴田真理子氏（学童保育指導員、神戸沖縄研究会「わんから」主宰）
 調査研究 「ヤマトに生きるウチナー2世の女たち」
 聞き取り調査、記録、刊行
- 第6回 1998 8件（6個人、2団体）
 助成 アメラジアン教育権を考える会（セイヤーミドリ代表、上里和美世話人代表）
 自活動 「アメラジアン（米国人のアジア人との混血、この場合日本人）の子供に“ダブル”としての教育をするための学校づくりを目指す」運動
- 第7回 1999 10件（6個人、4団体）
 助成 ネットワーク・そら（森根ひかり代表）
 自活動 性暴力による被害者のネットワーク『通信そら』発行
- 第8回 2000 6件（6個人）
 助成 安里陽子氏（フィリピン大学大学院アジアセンター修士課程）
 調査研究 「フィリピンの沖縄女性たち～その適応とエスニックアイデンティティー」
- 第9回 2001 5件（3個人、2団体）
 助成 遠藤清美氏（沖縄市嘱託消費生活相談員）
 調査研究 「沖縄県における多重債務と女性問題」
- 第10回 2002 11件（3団体、8個人）
 助成 沖縄県女性団体連絡協議会（伊志嶺雅子会長）
 記念誌刊行 『女団協35周年記念誌—女性団体の歩み—』
- 第11回 2003 2件（1団体、1個人）
 助成 基地・軍隊を許さない行動する女たちの会（共同代表高里鈴代、糸数慶子）
 改訂・英訳版作成 『沖縄・米兵による女性への性犯罪』（6版）の増補・改訂・英訳版作成